

いちだ  
みなみ展

「青いろの世界で  
生まれくる音」

いちだ  
みなみ展

「青いろの世界で  
生まれくる音」

# いちだみなみ展。

「青いろの世界で生まれくる音」

2023

4.22 sat - 6.25 sun

鹿児島県霧島アートの森  
アートホール展示ロビー

主催 鹿児島県霧島アートの森

後援 南日本新聞社 / KKB鹿児島放送  
KTS鹿児島テレビ / KYT鹿児島読売テレビ  
MBC南日本放送 / μFMエフエム鹿児島

## ごあいさつ

鹿児島を拠点として「音」をテーマに制作活動している美術家 いちだみなみの個展を開催します。\*心象を視覚化できないいちだみなみは、心の奥底に広がる“青いろ”を表現の軸に据えながら海の音や空の音などにそのイメージを求め、音と色の調和を試みている希な作家です。

本展は、色鉛筆やアクリル絵の具で描かれた淡く青い深海をイメージさせる平面作品やPPバンドの球体によるリズムカルなインスタレーションなど、これまでの作品に加え、新作も発表しますので、現実の喧騒から解放される穏やかな時間と空間をお楽しみください。

静かに語りかける作品は時間や空間の概念を卓越した存在感を放ち、心の奥深く浸透していくことでしょう。

鹿児島県霧島アートの森

\*心象を視覚化できない：「アフアンタジア」という心的イメージを思い浮かべることができず、頭の中でイメージを視覚化することのできない脳の特性による。



このたび、「霧島アートの森 アートラボ いちだみなみ展 青いろの世界で生まれくる音」を開催させていただきました。

心の音をテーマに絵画として二次元に描かれた心の空間と実空間には音楽や立体でそれを表現したインスタレーション、そしてそれらが空間に表出していく過程や二次元の世界での変化の形を映像でも展示しました。その全ては彫刻《わたし》から放たれていくものでもありました。

ここでいう心の音というのは、感情ではなくそれになる前の状態の音を指しています。私はアファンタジアという脳の特性ゆえに、映像を頭の中で視覚的な心象イメージとしてもたず、その瞬間瞬間に在る何か（私は音の粒と言っています）を丸をつかって深層に湧き出てくる深度の異なる青の世界に写しとっていくのです。

生まれたそれは、どこか空や海のようにもあり、宇宙のようにもあり、細胞分裂のようにもあり、物質の揺らぎのようにもあり、私の心の奥深くに存在していた心の欠片からなるものなのかもしれません。ただ、それらは私にとっては何かをイメージした先に生まれるものでも、ある時点の感情を想起するものでもなく、自分の中に刹那に在った心の音の粒たちを瞬間的に意味などなく、ただ写しとったにすぎない正負どちらでもない±0の音です。

そしてそこで何かしらの影響が生まれ、生まれなかったかは、観測した人のみを知り得るものです。とはいえ、私はこの作品たちがただそこに在り、静かに心に寄り添うアートであることを願っております。

最後になりましたが、本展開催にあたり、ご尽力くださいました関係者の皆さま、ご来場いただきました鑑賞者の皆さまに、深く御礼申し上げます。

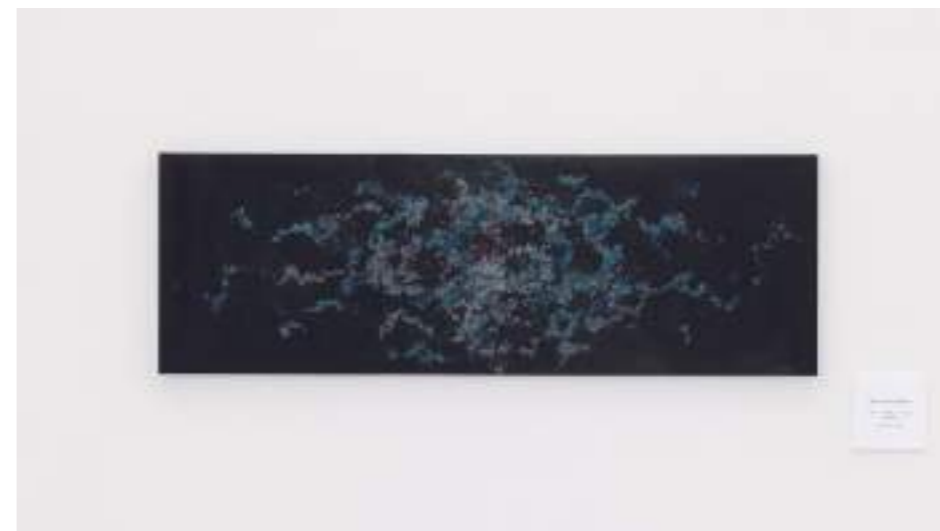
いちだ みなみ











《My emotion 2022#01》  
300×900mm、2022  
木製パネル、画用紙にアクリル絵具、油性色鉛筆



《My emotion 2022#02》  
300×900mm、2022  
木製パネル、画用紙にアクリル絵具、油性色鉛筆

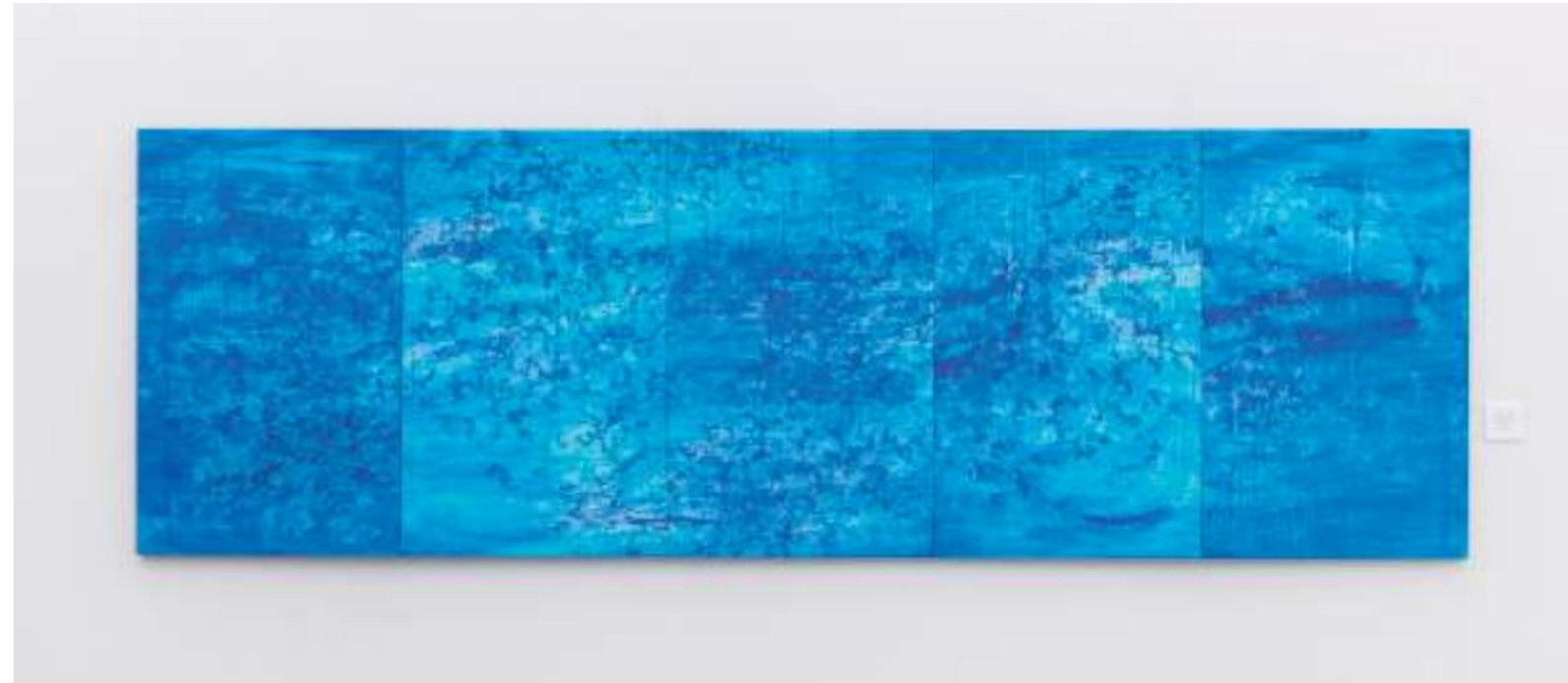




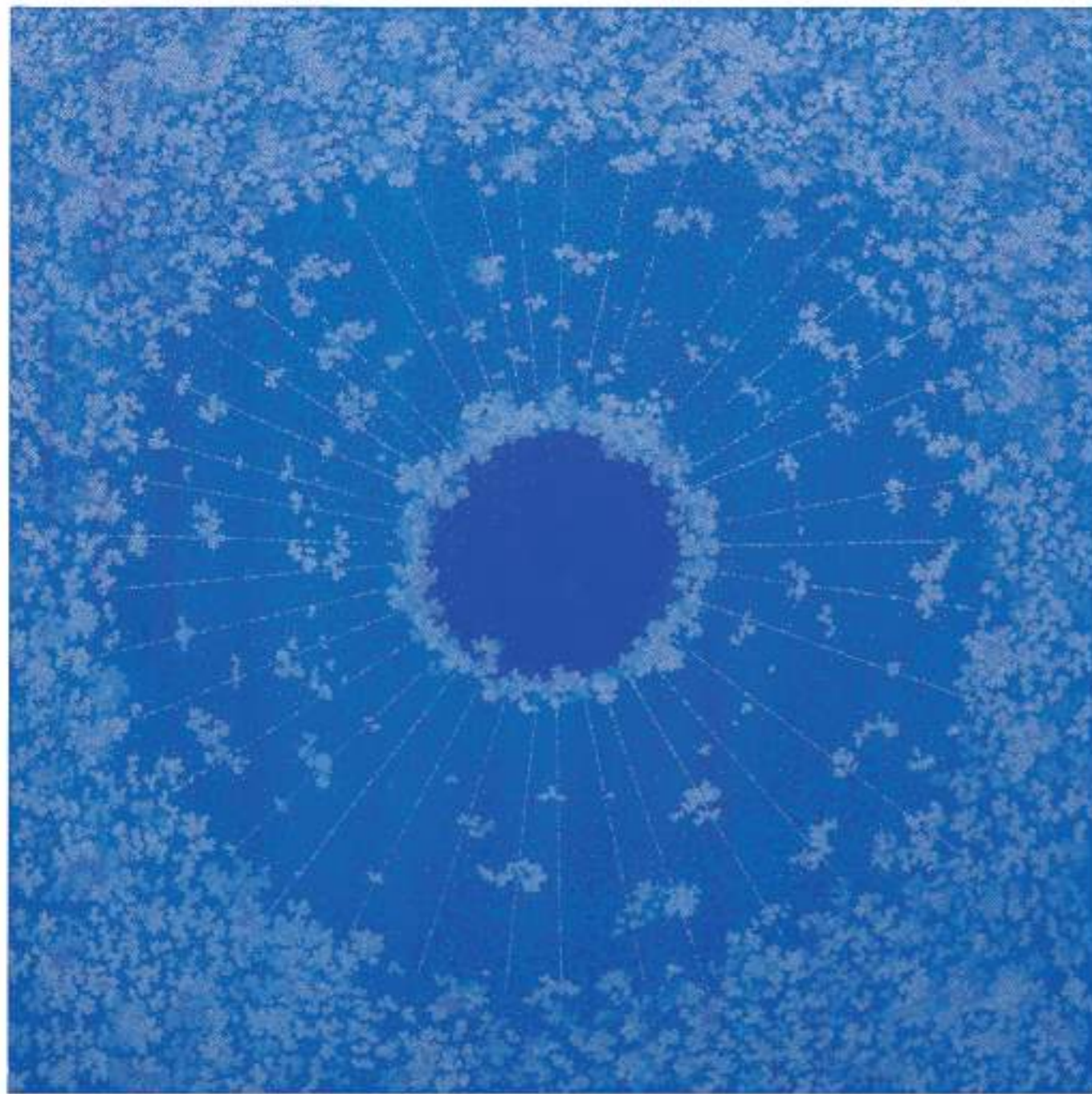
《My emotion 2022#09》  
1516×729mm、2022  
木製パネル、画用紙にアクリル絵具、油性色鉛筆



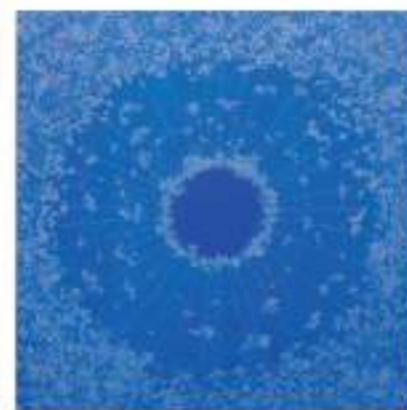
《My emotion 2022#34》  
S20、2022  
木製パネル、画用紙にアクリル絵具、油性色鉛筆



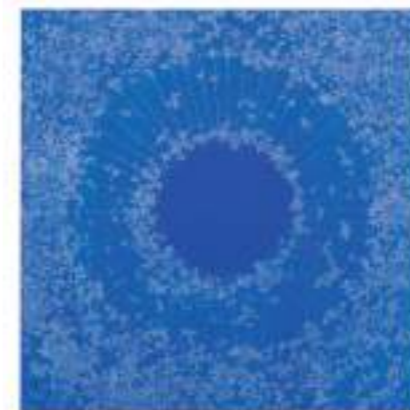
《My emotion 2023 #心の奥深くに在る音》  
M50 5枚1組、2023  
木製パネル、画用紙にアクリル絵具、油性色鉛筆



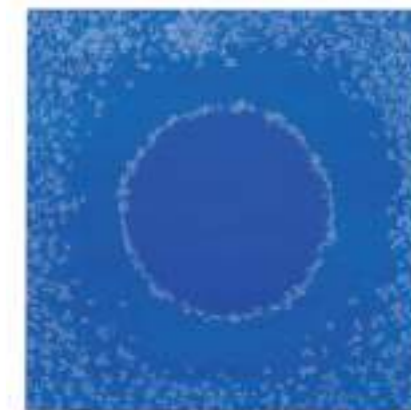
My emotion 2023 #生まれくる音 | S50. 2023  
木製パネル、画用紙にアクリル絵具、油性色鉛筆



(I)



(II)



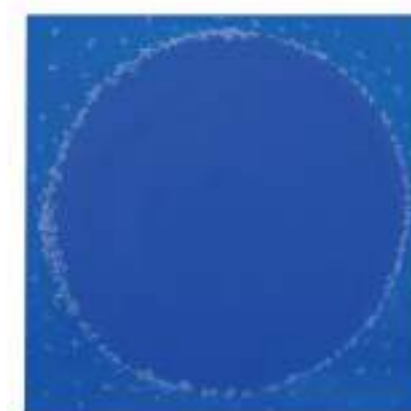
(III)



(IV)



(V)



(VI)



《青色の世界で生まれくる音》が  
形になるまで (映像)







#### ワークショップ

4月29日(土・祝)「《音の粒》の展示体験をしよう!」では、PPバンドで制作された《音の粒》を作家と共に展示体験するワークショップを実施し、5月5日(金・祝)「PPバンドで《音の粒》をつくってみよう!」では、PPバンドを折ったり、接着したりすることで《音の粒》を制作するワークショップを実施した。いずれの参加者も《音の粒》の構造に興味を持ち、作品の設置体験と制作に思い思いに取り組んでいる様子であった。



#### アファンタジアとは

「心の目」で視覚的なイメージを見ることができない状態を指すために使われている名称で、「頭の中に心象イメージを視覚化できない脳の特性」のことである。

補足:「アリストテレスが心の目を「ファンタジア(phantasia)と呼んだ」ことからゼーマン教授は心の目が欠如している「アファンタジア(aphantasia)と命名する」ことにしたとある。(\*1)アファンタジアの概念は1880年代の心理学者フランシス・ゴールトン卿が始まりだが実際に、アファンタジアという専門用語は、イギリスのエクセター大学のゼーマン教授と共同研究者によって、2015年に作り出され、比較的最近認知され始めたものである。

\*1 アラン・ケンドル『アファンタジア イメージのない世界で生きる』高橋純一・行場次朗訳、北大路書房、2021年。



## 境界

今回2023年度アートラボとして、本館アートホール展示ロビー内でいちだみなみの展示を行った。今回の展覧会は「青いろの世界で生まれくる音」という副題が付されている。いちだは“青いろ”を表現の軸に据え、海の音や空の音などにそのイメージを求め、音と色の調和を試みている。

2面がガラス張りで野外空間と接する展示ロビー内の壁面と、床面に配された展示什器の上には大小の絵画作品が展示され、空中には600個を超えるPPバンドから制作された《音の粒》を配置してインスタレーションが行われた。

絵画作品の中で繰り返し描かれる円や、空中に配された《音の粒》はいずれも原子や電子などの微細な粒子、あるいは細胞や宇宙空間を想起させる。

制作を始めるにあたって、具体的なイメージを持たないと語るいちだは、写経をするように無心になり、繰り返し円を描き続ける。繰り返し描かれる円は、全てを覆い尽くすように無限に増殖するのではなく、緩やかに明滅するように生成と消滅を繰り返しているようでもあり、まるで空間全体が呼吸しているかのようでもある。

いちだは、「感情が生み出される以前のイメージを描いている。そこには、喜怒哀楽や具体的な心情はなく、感情が生み出される前の『波』や『水紋』のようなもの、あるいはその気配の様なものしか存在しない。」と説明している。

心象を視覚化できない「\*アファンタジア」という脳の特徴を持ついちだは、海の「音」や空の「音」にイメージを求め、制作の起点としているが、「音」は空気の振動によって生じる「波」であり、特定の「像」を持たない。しかし特定の「像」を持たないということは即ちイメージを持たないということではなく、いちだは「音」を起点として、独自の感覚で音と色の調和を生み出すことを試みている。「音」は空気を介して空間に広がるため、描かれた「円」は一様に同心円状に空間に広がっていくように思われるが、いちだの生み出す「円」の広がりはいずれも不均一であり、「円」の周

囲の空間に存在する「円」とは異質の何かによる「抵抗」を感じさせる。時に揺らぎ、周囲の世界とせめぎ合いながら「円」と「周囲の空間」によって創り出される「境界」はいちだの「意識」と「無意識」の「境界」そのものようであり、作品を鑑賞していると、思考を閉じて描き続ける過程で、いちだの意識が外界に溶けていく様を眺めているようでもある。

いちだはアファンタジアの特性を持つため、作品の最終的な完成形の像を持たない状態で制作は進められるが、「制作の終わりはわかります。」と語っている。いちだの語る作品の「終わり」とは、ある時点での「意識」と「無意識」あるいは「自身」と「世界」の調和がとれた状態、とも言い換えることができるのではないだろうか。

私たちの周囲には、無数の「境界」があり、この「境界」によって私達は個々の自意識を保っている。しかしながらその「境界」の多くは人間が対象を認識するための記号として恣意的に定めたものであり、曖昧なものだ。いちだは自身の表現において繰り返しの中で生み出される「差異」、あるいはそこから生み出される「揺らぎ」のようなものを捉えようとしている。それは、反復する作業の中で自身の意識を濾過していく作業のようにも感じられる。作品には意識を掬い取られた後に残る「気配」のようなものが結実しており、鑑賞者はその「気配」にふと立ち止まり作品を眺める。

まるで私達の周囲の空気が絶えず揺れ動くように、作家が作品に手を加えるごとに、作品の中での「バランス」は刻々と変化していく。これからどのように揺らぎ、変化していくのか作家の今後に注目したい。

鹿児島県霧島アートの森  
学芸専門員 中森祐介

\*P23「アファンタジアとは」参照



## いちだ みなみ

1989年横浜生まれ、広島市立大学大学院芸術学研究科博士前期課程修了。  
鹿児島市在住。

### 〈主な個展〉

- 2023年 コレクション展『広島ゆかりの新鋭作家たち』（広島 泉美術館）
- 2022年 個展『心の奥深くに在る音 いちだみなみ展』（鹿児島 長島美術館）  
個展『心音の旅いちだみなみ展』（鹿児島 長島美術館）
- 2021年 夏の小企画展『青いろの世界いちだみなみ展』（鹿児島 長島美術館）
- 2019年 いちだみなみ個展『音の森-アートで奏でる音』開催  
（鹿児島 HOTEL & RESIDENCE 南洲館）  
いちだみなみ個展『青いろの音展』開催（鹿児島 長島美術館）
- 2016年 『個展 いちだみなみ 音の森展 - The forest of sound』  
（鹿児島 WAHAHA! gallery）
- 2015年 『〇と色と形と…展』開催（鹿児島 丁子屋）
- 2013年 『個展 Ichida Minami -THE BLUE SEED-』開催（鹿児島 マルヤガーデンズ）  
『Gセレクション 個展 いちだみなみ 青いろの太陽の下で』開催（広島 ギャラリー G）

### 〈主なグループ展〉

- 2022年 チャームプレミアグラン 第20回アートギャラリーホーム受賞・入選作品展（東京）
- 2018年 SATSUMA 城山物語 野外アート作品展 鹿児島市中央公園（鹿児島）
- 2017年 KTSナマ・イキVOICEアートマーケット（鹿児島）  
大隅アートライブ展〜神は隅に宿る〜 肝付町丸岡公園（鹿児島）
- 2016年 KTSナマ・イキVOICEアートマーケット（鹿児島）  
慈眼寺ガーデンマーケット2017（鹿児島）
- 2015年 三菱商事アート・ゲート・プログラム『Who makes art?』（東京 gallery GYRE）
- 2014年 『グループ展 Exhibition in mexico 2014』（メキシコ 日本大使館ギャラリー）  
『かさなり 3人展』（広島 手織工房 TeoriyaLD）
- 2012年 三菱商事アート・ゲート・プログラム『Who makes art?』（東京 gallery GYRE）

### 〈主な受賞歴〉

- 2022年 CHARM CARE CORPORATION 第20回アートギャラリーホーム展 入選
- 2016年 「KTSナマ・イキVOICEアートマーケット」 三位入賞
- 2015年 「第27回 三菱商事アート・ゲート・プログラム」入選
- 2014年 『「山梨の自然とアート」アート・オークション』入選
- 2014年 「第2回 富士山世界文化遺産登録記念アート・オークション」入選
- 2013年 「山梨ワイン+若手アーティスト アート・オークション」入選
- 2013年 「第1回 富士山世界文化遺産登録記念アート・オークション」入選
- 2012年 「第17回 三菱商事アート・ゲート・プログラム」入選



公式ホームページ

## 広報実績

- (1)新聞 南日本新聞(4/18・5/6)
- (2)テレビ・ラジオ KTS鹿児島テレビ(4/26)
- (3)その他(抜粋) 財団情報誌「憩」5・6月号、湧水町広報「ゆうすい」4・5月号、  
TJカゴシマ5・6月号、かごしま文化情報センター(KCIC)、ART AgendA



個展広報チラシ(A4)

## 謝 辞

本事業の実施にあたりご協力を賜りました  
下記の関係機関、関係者の皆様に  
心より感謝申し上げます。(敬称略・順不同)

南日本新聞社

KKB鹿児島放送

KTS鹿児島テレビ

KYT鹿児島読売テレビ

MBC南日本放送

μFMエフエム鹿児島

## [ 記 録 集 ]

アートラボ いちだみなみ 展

青いろの世界で生まれくる音

執 筆：いちだみなみ、中森祐介

デザイン：夢世デザイン

撮 影：南フォトスタジオ、鹿児島県霧島アートの森

編集・発行：鹿児島県霧島アートの森

発行日：2024年3月31日

©鹿児島県霧島アートの森2024